

# 知られざる芸能史探究

芸能史に限らないが、英語圏のことはかなり詳しく知ることが出来るが、ロシア語の世界には知らないことが多い。

本書の著者である大島幹雄さんは、サーカスのプロモーターで研究家でもある。特にロシア語圏のサーカスや道化師を日本に数多く招き、著作活動でも、ロシア語圏の仕事に生涯を懸けた人を探究したものが多し。

今回、大島さんは今までほとんどの芸能史で深く探究されていなかった、日露戦争後にロシアで活躍したサーカス芸人「イシヤマ」「タカシマ」「シマダ」の足跡をたどるうちに、ロシアで最も有名な日本人の一座「ヤマダサーカス」を調べることになる。

ヤマダサーカスを有名にしたのは「ハラキリショー」である。「ハラキリ」については1900年にパリ万博に出演した川上音二郎一座の真奴の「ハラキリ」が大評判となり、そのままをしたハラキリショーで欧州を長く巡業した花子の生涯を追った研究はあるが、「ハラキリ」がどのような演出でショーとして成立していたかという記述はなかった。私が抱いていた、この長年の謎を大島さんはロシアにあった本の中からあっさり

## 著 大島 幹雄 明治のサーカス芸人はなぜロシアに消えたのか

と見つけ出し、本書で紹介している。

さらに「ヤマダサーカス」の足跡を追い、大阪の千日前を一大興行地に仕立てた希代の興行師奥田弁次郎と長男の2代目が残した十数冊の帳面を調べ、ロシアや、木下サーカスとのつながりも見出す。弁次郎の記録は12年の大火や戦時中の空襲で一切失われたと思っていただけにこれも驚きだった。

ロシア革命後のスターリン時代に、スパイ容疑で処刑された「ヤマサキ・キヨシ」らサーカス芸人の生涯も、大島さんは細い線をたどっている。

芸を頼りに異国の地に渡りながら、戦争や革命、粛清の波に翻弄された日本人たち。「なぜロシアに消えたのか」というタイトルにこめた著者の無念の思いはきつと読者に届くだろう。

(メディアプロデューサー・

沢田 隆治)

(祥伝社・1680円)

